

日本の大学における 国際共修の取り組みとその展開： 異文化間教育の視点から



堀江未来

立命館大学 国際教育推進機構 教授
(立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長)

2017年6月18日

発表の目的・内容

日本における「国際共修」実践の・・・

背景

ねらい

課題

パターン

方法論

多文化間共修

多様な文化背景をもつ
大学生の学び合いを支援する

坂本 利子
堀江 未来
米澤 由香子

【編著】

学文社



「国際共修」「多文化間共修」
「多様な文化背景をもつ大学生の学び合い」

「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ（正課活動及び正課外活動）において、**その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合うこと**」（及びその仕組み）

（坂本・堀江・米澤 2017）



なぜ「国際共修」？

日本の大学の国際化政策の中では

- 1983年～：外国人留学生の受け入れ促進・環境整備
- 2000年～：派遣・双方向交流・研究・組織など多様化
- 2014年～：スーパーグローバル大学創生事業
 - **すべての学生を対象に→学内での国際教育機会提供**

「国際共修」のねらい

- 文化（言語）背景の異なる学生が、コミュニケーションの障壁をお互いに乗り越え、そのプロセスから（安心して）学ぶことのできる教育的仕掛けを提供する
- 外国人留学生が、現地学生との交流を通じて学ぶ機会を提供する
- （国内学生の海外留学への動機付けを高める）
- （国際学生の日本留学に対する満足度を高める）

国際共修のねらい：異文化体験をとおした学び（海外留学など）に匹敵する教育経験を、より多くの学生に提供する

異文化体験を通して身につく可能性のある スキル・能力・姿勢

- オープンな心
- 違いを楽しむ気持ち
- 相互理解・尊重の姿勢
- 良い聴き手であること
- 柔軟な考えと行動
- 多面的な見方
- 好奇心
- 語学力
- 交渉力
- 観察力
- 忍耐力
- 省察力
- 立ち直る力
- 情報収集力
- 想像力
- 自己理解
- 自信
- 試行錯誤できる力
- 問題発見・解決力
- ストレス・コントロール
- 感情コントロール
- 判断を保留する姿勢
- 創造性があること
- 曖昧さに対する許容
- ユーモア など

(BRIDGE Institute 2014)

自文化中心主義をのり超える

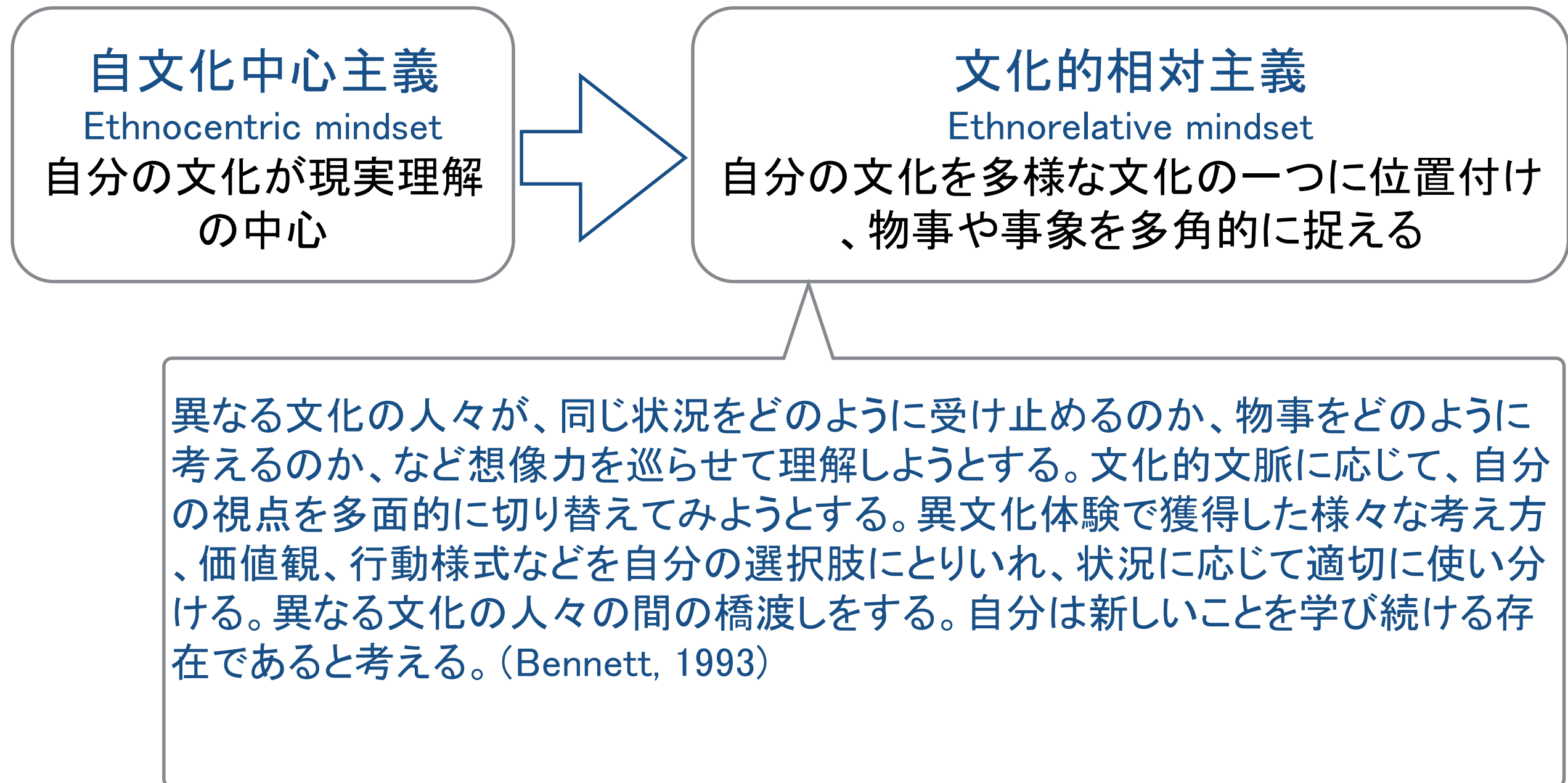
自文化中心主義 (Ethnocentrism) とは？

「『私たちのやり方が一番よい・正しい』と信じ、全ての物事を自分の基準で判断・評価する心理的状态」(Bennett 1993)

「新しい情報は、すでに知っている情報との関連でしか認識・理解できないという、人間の特徴」(Mestenhauser 2001)

Developmental Model of Intercultural Sensitivity (Bennett, 1993)

Intercultural Development Continuum (Hammer 2012)



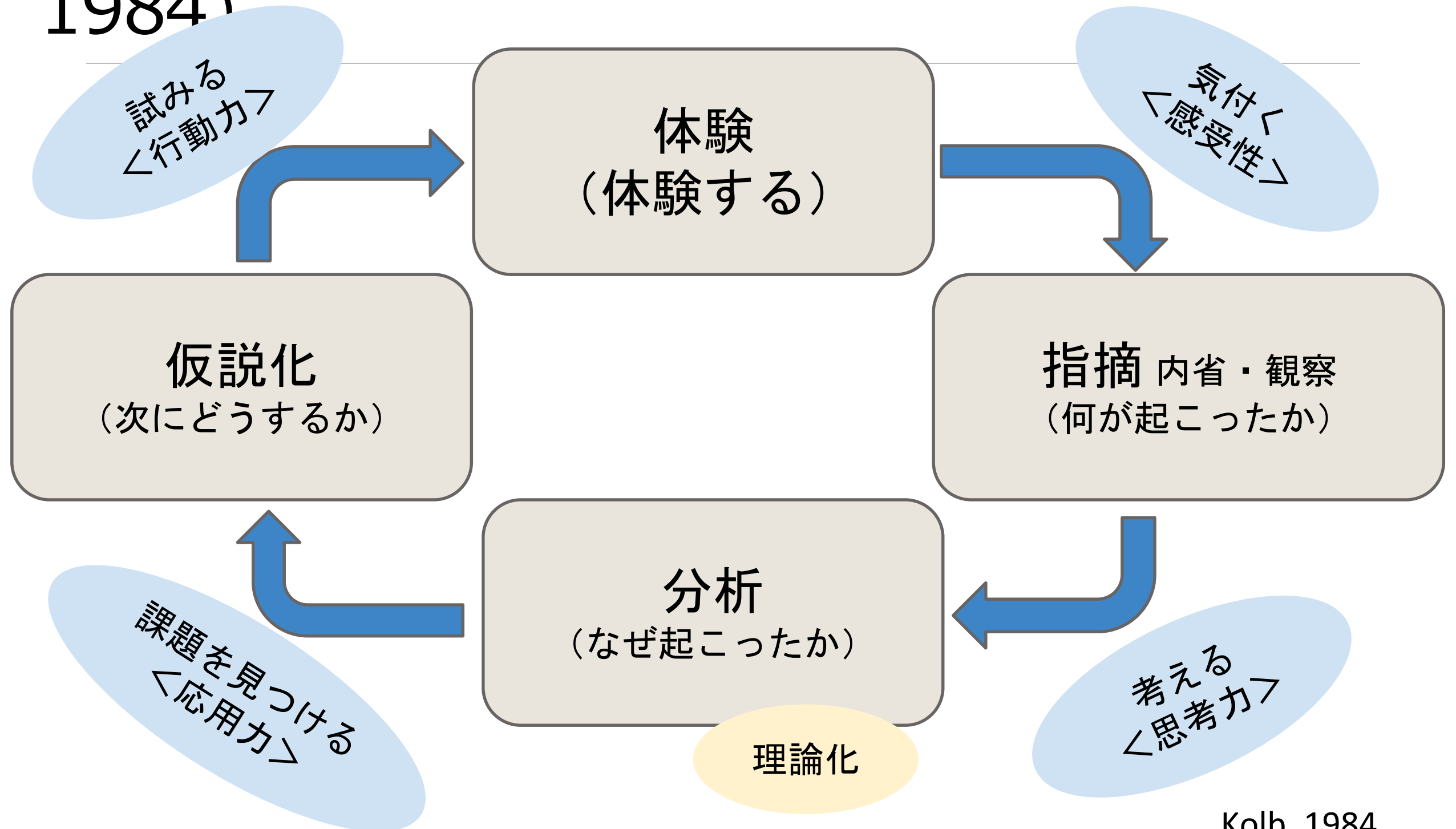


国際共修の実践パターンと方法論

国際共修の実践パターン

- 科目： 教養科目（全分野） ・ 専門科目（特定分野）
日本語教育 ・ 外国語教育
- 言語： 単言語 ・ 多言語（日本語 ・ 英語 ・ その他）
- 場所： 教室内(Internationalization at Home) ・
海外(Internationalization abroad) ・ その他

方法論 1 : 体験学習の循環過程 (Kolb, 1984)



Kolb, 1984

方法論 2：異文化接触の強度を左右する諸要素 (Paige, 1993)

- 学習者にとって「学ぶのに適切な」レベルの異文化体験強度 (心理的負荷) とは？
- Intensity Factors of Intercultural Experience (Paige, 1993)からの抜粋 8 項目

文化の違い・違いの捉え方	過去の異文化体験の有無
自文化中心主義の度合い	期待感
言語力・言語使用の必要度	見える違い・見えない違い
文化への入り込み度合い	文化的孤立度

接触仮説理論 (Allport 1954)

- 異文化交流を通して学びを最大化し、個人間・異文化間の相互理解につなげるための環境条件
 - メンバーがゴールを共有していること
 - グループ内での協力すること
 - メンバーの立場が平等であること
 - 制度的なサポート（ルール等）が保証されていること

課題と展望

1. 「文化的多様性」の捉え方をより柔軟かつ広がりをもたせ、人の文化的アイデンティティの複雑さへの気づきを高めるには？
 - ・ 多文化環境における個性の発揮と尊重を目指して
2. 国際共修の意義をより広く伝えるには？
 - ・ 未経験者にわかりづらい、言語化しにくい学びの特徴
3. 国際共修を企画・運営する教職員の異文化感受性を高めるには？
 - ・ 自分の異文化間能力・感受性が、プログラムでできることの限界

参考文献

坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）「多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する」学文社.

Allport, G. (1954). The Nature of Prejudice. Mass: Addison-Wesley.

Arkoudis, S., Yu, X., Baik, C., Borland, H., Chang, S., Lang, I., Lang, J., Pearce, A. and Watty, K. (2010) Finding Common Ground: Enhancing Interaction Between Domestic and International Students. Melbourne: Australian Learning & Teaching Council.

Bennett, M.J. (1993). Towards Ethnorelativism: A Developmental Model of Intercultural Sensitivity. In R.M. Paige (ed.), Education for the Intercultural Experiences (pp.21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

BRIDGE Institute (2014) BRIDGE サマーセミナー資料.

Hammer, M. (2012). The Intercultural Development Inventory: A new frontier in assessment and development of intercultural competence. In M. Vande Berg, R.M. Paige, & K.H. Lou (Eds.), Student Learning Abroad (pp. 115-136). Sterling, VA: Stylus Publishing.

Kolb, D.A. (1984): Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Mestenhauser, J.A. (1976). Learning with foreign students. Minneapolis, MN: North Central Publishing Company.

Paige, R.M. (1993) "On the Nature of Intercultural Experiences and Intercultural Education." In R. M. Paige (ed.) Education for the Intercultural Experience. (pp. 1-19) Yarmouth, ME: Intercultural Press.